
月身（つきみ）

マントン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つきみ
月身

【Nコード】

N7518Q

【作者名】

マントン

【あらすじ】

日常生活に飽き飽きしていた悟^{さとる}。友人のすすめで薬の売人をはじめることになった。非日常的な生活をそれなりに楽しんでいたが、ある出来事からとんでもない事態に……。奈落のそこへ落ちてゆく……。

ブローグ

9月。街には、秋の訪れを告げる言葉が飛び交う。

読書の秋。

芸術の秋。

食欲の秋。

スポーツの秋。

まだまだ残暑の厳しいこの季節に食欲の増す奴の気がしれない。読書、芸術、スポーツ、どれをとっても今の季節に楽しめるとは思えない。いったいどんな心理状態で行うのか、一度観察してみたいものだ。だが、ひとつだけこの季節を好きになれる出来事がある。「中秋の名月」というやつだ。昔から月を見るのが好きだった。大好きだった。どこか自分と似ているといつも思っては、月を眺めていた。この季節は月が一番輝く。周りには、たくさんの星が輝く。しかし、自らが光を放ち過ぎるとみんな消えてしまう。孤独な月。自分を鏡で見ているようだ。

孤独が好きだった。誰に何を言うでもなく、言われるわけでもなく。孤独が好きだ。あの月のように光を放てば、周りには誰も見えなくなる。それが、一番の願い。

孤独の本当の意味は、わからないけれど・・・。

9月中旬。何もする気が起こらない悟は、^{ついで}真夏のセミのように鳴く携帯を素早く素手で捕まえた。

「もしもし……。どちら様？」

「どちら様って！携帯に名前であんなだろう。相変わらず、ぐだぐだだなあ……。悟くんはあ」

「何だよ！ヒロムは何でいつもテンション高いんだよ。声聞くだけで疲れるよ」

「そんな言い方ないだろ。それよりさ、坂下さかしたからいいのが入ったって連絡があつてさ。悟もいくだろ？凄いらしいぜ、今度のやつ」

電話の相手は木下ヒロム、二十一歳。十六の頃から麻薬の虜。根っからのジャンキー。そして、悟の数少ない友人でもある。

ヒロムの家は、母親と義理の父、それと姉の四人家族だ。義父は、ヒロムが小学校五年の頃に再婚し、一緒に住むようになった。この父親は駄目おやじ代表のような男だった。朝から酒を飲んで、毎日のように母、姉に暴力を振るっていたらしい。この頃から少しずつヒロムがおかしくなっていた。

小学生のくせに飲めない酒を飲み、気に入らない奴には鉄拳制裁。一度などは、大学生の頭を金属バットで振るスイングしていたという話を悟は聞いたことがある。

それから、中学卒業と同時に薬に手を出し始め、今に至る。明るいキャラとは裏腹に悲しい男なのだ。

「行ってもいいけど、晃あゆむには声掛けたのか？」

「あいつ、携帯つながんねーの。また、どっかで窃盗中毒にでもなってるんじゃない。それより、今日二十一時にいつものところだから遅れんなよ。遅れると坂下のおっさんうるせえからなあ」

「ああ、わかったよ。行く前に電話いれるよ。じゃあ、後ほど」

途中ちらほら名前がでた、坂下というのは、この界隈を仕切る薬密売専門の暴力団組員。

そして、彼。高たかしな科。悟あきこ二十一歳。大学へ籍はおいているが、ほとんど行っていない。二トのような生活を送ってる。

母と父、それに妹が一人の四人家族。父は普通のサラリーマン。母は、専業主婦で、妹は私立の女子高に通う高校二年生。非の打ち

所のない家庭環境だと悟はよく周りから言われている。

しかし、兄弟というのは、親がどれだけ平等に扱っていたとしても、無意識のうちに不平等になってしまふものなのだろう。

いつしか、悟より数倍頭のいい妹と比べられるようになり、自分の居場所を失っていった。その頃から父と母と妹だけが、家族のように見えていた。

悟は、自分は拾われてきた子供だと言い聞かせるようになった。しかし、家出をしようとは思わなかった。自分自身割り切って、家族とは少し距離をおいて付き合っている。

「今日は、いくら売れるかなあ・・・」家族のことを打ち消すかのように独り言を言ってみた。

「晃にメールでもしとくか。えっと、いつもの所に二十一時時集合つと。暇なら来るだろう」

高山 晃^{アキラ}、彼も悟の数少ない友人の一人。とにかく、手癖が悪く、何でもすぐ盗んでしまう窃盗癖がある。これが、いつもつるんでいる仲間だ。

メールにあったいつもの所とは、街の隅っこの方にある少し寂れた（さびれた）ネットカフェ「武蔵」。名前の怪しさからもわかるように、平日などはほとんど客もいない。店員も中年の少しハゲ散らかったおっさんが一人。悟たち御用達の店でもあった。

そこで坂下と待ち合わせ、薬を受け取る。カフェの席に着くと、個室の両側にスライド式の小窓が付いており、そこから受け取るという方法である。小窓の使用方法は本来、きつととなりの友人と話ができるようにとの店側の好意だろう。まさか、麻薬の密売が行われているなど考えもしないだろう。

薬を受け取ると、俗に言う「シマ」と言われる場所へ向かう。「シマ」というのは、いわばその暴力団の縄張りである。

「シマ」へ行くと、客が声を掛けてくる。合言葉だ。そこから、金と薬の交換である。

合言葉は、「今日は、月がきれいだね」「中秋の名月ですから」と。嘘のような本当の話である。

季節ごとに合言葉は違っており、冬になると「明日は、雪かな?」「きつと白くなりますよ」。春は、「今日は、風が強いねえ」「春一番が吹いてますから」。そして、夏。「セミがうるさいねえ」「夏ですから」。

もっとシンプルにすればいいのにと、悟は何度も思ったものである。「山」「川」などではいいのではないかと。

一番驚いたのは、客層である。勝手な想像かもしれないが客は、みなチンピラみたいなのが買いに来ると思っていた。

いざ蓋^{ふた}を開けてみると、同世代の男女。一見普通のサラリーマン。さらに驚いたのは、同じ大学でよく見かけていた大人しそうな女子が買いに来たことは、とても衝撃的だったのを覚えている。

ヒロムもやっているのだから、今思えばたいしたことではない。

しかし、その頃の悟は多少複雑な気持ちになったことを思い出した。

悟がこの仕事を始めたのは半年前。息をすると、花のほんのり甘さを感じさせる女性的な香りと、鼻をむずむずさせる不快感の混じる3月のことだった。悟が花粉症なら間違いなく不快感のみだろう。まだ、女性的な香りのほうが強いと思っていた。

三月のある日、不快感全開のヒロムから呼び出され、坂下を紹介された。対して面白いこともなかった悟は、興味本位で始めて半年それなりに楽しんでいた。

適応能力というのは、人間の一番の武器かもしれない・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7518q/>

月身（つきみ）

2011年2月8日23時08分発行